

編輯室の内外

櫻花既に紅を潮せむこし、春色駘蕩、さも嚴寒を忘れたやう、人間は勝手なものだ。唯だ冬から引續いてゐるのは政界の不安定だけ、特別議會の開かる、四月二十日、兩と爲るか風さなるか夫れが疑問、徒に編輯子の好奇心を唆らしむ。

編輯室から眺めてゐるぞ、我が黨議員の一名が死亡した、一名が拘引されたぞ、一名の多少にも血眼と爲つて勘定してゐる二大政黨、お氣の毒なやうな感もする、が併し、夫れが政權にあり附き度い爲の病だすれば、神經衰弱病症と評したい。

政界の不安定、爲に各省をして怠業状態に陥らしむ、高い俸給を貰つて平將門のお祭をやつたり花見旅行の競争をやつてゐ

る、之には流石本職の社會局でも干渉する譯には行くまい、官吏を三日すりや罷められぬと言ふのも無理はない、夫れに比較すると詰らぬものは編輯子、朝から晩まで原稿紙と睨合、夫れであつて、櫻の花が咲いても花見に行けさうにも無い、是では社會問題が擡頭するのも當然だ。

官吏のこゝならモー一つ、怪文書とか第二怪文書と、次から次へ世の中を騒がしてゐるが、官廳の秘密文書を在野黨に渡すやうな官吏を養つてゐては、いかに鈴木内相が眼を光らしても、政府の秘密は保たれない、逓信省訓令の不遵守を力説した路政官を譴責した位の内相のこゝ、遠の昔に被首すべき筈なのに、夫れをすることが亦政府の痛手だとは、双方に疵持つなまきけなま、世の中のことはいく出来てゐる。

内田副會長歸朝されて、依例ささまやかな

歡迎會を催した、其の席上でお土産の歐米に於ける道路視察談、随分新しい所を聞いた、その序の冗談、米國の女が散髪と短衣に浮身を變じてゐるのが頗る眼に附くそこで質問されたのは水野會長、男女の見分け方法はいかに、あそこが違ふぢやないかとの答辯に一同哄笑、口善悪ない編輯子の一人、歳はさつても、あそこの事は忘れられぬものと見えると、春らしい一夜であつた。(た)

本號定價 五拾錢

一ヶ年分 金六圓

東京市麴町區大手町一丁目内務省内

發行所 社團 改 良 會

發行兼 編輯者 上 山 陸 造

東京市小石川區久堅町一〇八

印刷所 共同印刷株式會社

印刷者 君 島 潔